

第3巻1号 2021年3月

秀明大学看護学部紀要

Journal of Faculty of Nursing

研究報告

高齢者施設における実習指導者の老年看護学実習に対する認識と実習環境
－フォーカスグループインタビューの分析をととして－

石川りみ子・江口 恭子・石津仁奈子

 秀明大学看護学部

Shumei University Faculty of Nursing

研究報告

秀明大学看護学部紀要
P.9-20 (2021)

高齢者施設における実習指導者の老年看護学実習に対する認識と実習環境 - フォーカスグループインタビューの分析をとおして -

The Instructor's Perception for Gerontological Nursing Practice Training, and
Environment of the Facility for Elderly
- From Analysis of focus group's interviews -

石川 りみ子¹⁾
Rimiko Ishikawa

江口 恭子¹⁾
Kyoko Eguchi

石津 仁奈子¹⁾
Ninako Ishizu

要 旨

高齢者施設の実習指導予定者を対象に老年看護学実習に対する認識と実習環境を明らかにし、大学と実習施設との実習指導体制構築のための基礎資料を得ることを目的に、フォーカスグループインタビューを行い分析した結果、8 カテゴリーと 27 サブカテゴリーが抽出された。

8つのカテゴリーは、【看護学生とは距離感があり看護実習をイメージで捉える】、【介護は日常生活支援、看護は治療・療養支援をする】、【実習環境に課題がある】、【学べる環境としての実習施設】、【認知症高齢者の理解とケアの工夫・葛藤】、【高齢者施設で求められる看護師像】、【実習指導者の役割と葛藤】、【大学との連携で求めること】である。対象者は、看護学実習の経験がないことから、実習の受け入れに戸惑いを感じていることが表出され、実習指導者との連携や大学と施設との連携を密にすることが求められた。また、実習環境としては課題を認識していると同時に施設実習ならではの学びがあることが表出され、特に認知症高齢者の理解と適切な対応について実践的学びができる環境であることが明らかになった。また、実習指導者の教育的視点は知識面だけでなく礼節や尊厳など対人関係の基盤になるものの意識が高く、看護職に必要とされる能力を協働で指導できる環境があることが示唆された。

キーワード：高齢者施設、実習環境、実習指導者の認識、認知症高齢者ケア、老年看護学実習

Key Words：facility for elderly, environment of nursing practical training, Instructor's Perception, care for elderly with dementia, gerontological nursing practical training.

I. 緒言

令和元年9月20日に総務省統計局が発表した「統計からみた我が国の高齢者」¹⁾によると、日本の65歳以上の高齢者は、3617万人と前年(3587万人)に比べ30万人増加し、過去最多となり、総人口に占める割合は28.7%で過去最高に達した。超高齢社会の進む中、要介護認定者数も増加しており、「認知症患者数は2025年に約650～700万人、2040年に約800～950万人、2060年に約850～1150万人と時代と共に

増加する」²⁾と予測されており社会問題となっている。このような中、高齢期をいかにそしてどこで過ごすか、認知症ケアのあり方などが重要課題となっており、2015年には、認知症施策推進総合戦略も策定された。そのような中で、認知症を抱える高齢者の生活の場として高齢者施設が果たす役割は大きくなっており、本学の老年看護学分野では、4年次に介護老人福祉施設又は保健施設において認知症高齢者を受け持ち、看護過程を展開する高齢者施設実習を実施する。

本学は、2017年度開学であり、2020年度に初めて行う高齢者施設実習に向けて、実習に対する考え方と実習環境の現状を知り高齢者施設実習の実習指導体制

1) 秀明大学看護学部

1) Faculty of Nursing, Shumei University

構築のための基礎資料を得る目的でアンケート調査³⁾を行った。その結果から、すべてのスタッフから学生は学ぶということの理解に向けた説明が必要なことや、現場には、スタッフがロールモデルとなれるようなケア場面があり、それを指導に生かすように実習調整を行うことなどが求められた。また、看護学生への指導経験がないことによる指導への自信のなさが挙げられたことから、実習の目標と施設指導者役割の共有が求められた。

高齢者施設実習についての先行研究では、看護学生は、実習中に認知症患者とのコミュニケーションに様々な困難や不安を抱えていることが明らかになっている。⁴⁾ 一方、実習を通して人生の先輩として対象を尊ぶことの意味や必要性を学んでいる⁶⁾ ことから、学生が認知症高齢者とのかかわりの中で何に難しさを感じ、どのように対象を理解しているのか、「感情を表出させることや、どのように対象理解しているかを確認する」⁶⁾ など、学生の状況に合わせた実習施設との協働による実習指導が不可欠と考える。

実習指導者・実習施設に関する先行研究では、実習指導者と教員が調整を綿密に行いお互いが歩み寄り姿勢が必要である⁷⁾ ことや、教育的に関わる組織風土を高めることが実習指導の質に関する自己評価を高めること⁸⁾ になるなどの報告はみられるが、高齢者施設実習の指導者に焦点をあてた先行文献はほとんど見当たらなかった。そのため、高齢者施設の実習指導者の老年看護学実習に対する認識と実習環境を明らかにすることは実習指導体制構築のために有用であると考えた。

そこで、本研究は、先述の全員対象としたアンケート調査³⁾ に続き、実習指導予定者を対象にフォーカスグループインタビューを行い、分析した結果を報告する。

II. 研究目的

本研究は、高齢者施設実習指導者の老年看護学実習に対する認識と実習環境を明らかにし、大学と実習施設との実習指導体制構築のための基礎資料を得ることを目的とする。

III. 用語の定義

高齢者施設：介護老人福祉施設や介護老人保健施設をさし、入居条件や設置主体は問わない³⁾ とする。

認識：意欲・情緒とともに意識の基本的な働きの一つで、物事・事柄に対する捉え方⁹⁾ とする。

IV. 研究方法

1. データの収集方法

研究方法は、本学の実習施設であるA高齢者施設の施設責任者に文書及び口頭で研究説明を行い協力の同意を得て、施設長の推薦する実習指導予定者にインタビュー調査の協力依頼を文書と口頭で行った。倫理的配慮として、研究参加は任意であり参加しなくても不利益にならないこと、グループインタビューはICレコーダーに録音することを説明し、同意の得られた10名を対象に行った。また、データはロック式USBメモリーに保存、すべてのデータは鍵付き保管庫に保管し、データ処理は個人が特定されないよう厳重に行った。

調査期間は平成30年6月～7月で、インタビュー調査は対象者の基本情報、職種・職位と職務経験年数および指導経験等を書面で入手後、構成メンバーの背景がほとんど同じであったことから参加者が自由に語れるよう少人数の2グループに分け、参加者の都合のよい日程で5名ずつに分けて各々40～60分間行った。方法は半構成的面接で、内容は①看護学生のイメージ、②介護実習と看護学実習の捉え方、③実習指導者の役割、④学修環境としての実習環境、⑤認知症高齢者ケア、⑥大学との連携の6項目とした。

2. データの分析方法

分析方法は、得られた2つのグループの逐語録を、所属グループを明らかにしながら一つにまとめて分析を行った。分析は、実習指導に対する認識、施設の実習環境や大学との連携に関わる内容をまとまりのある文脈で切り取り、意味内容が損なわれないよう文章を整え、吟味して整理・分類・コード化し、カテゴリー化を行った。分析結果の妥当性の検討は老年看護学分野の質的研究に実績を持つ研究者間で何度も討議を行い分析が飽和するまで行った。

なお、本研究は秀明大学研究倫理委員会の承認（承認番号17E009A）を得て行った。

V. 結果

1. フォーカスグループインタビュー対象者の概要（表1）

フォーカスグループインタビューは実習指導予定者

を対象に施設長から推薦をうけ、同意の得られた者を対象とした。同意の得られた者は10人であったため、参加者が活発に意見交換できるようにと5人ずつ2グループに分けて行った。

対象者10人の内訳は、男性6人、女性4人で、年代は30代から50代の範囲であった。両グループとも

職種は介護福祉士、ケアマネジャー、生活相談員で、第1グループに事務職一人が含まれた。参加者の経験年数は3年～18年であった。職位は中間管理職が8人、実習指導経験者は事務職1人を除く全員で、看護学生に対しては2人のみであった。

表1 フォーカスグループインタビューの対象者の概要

ID	性別	年代	職種	年数	職位	当該施設の勤務年数	実習指導経験の有無	対象学生	看護学実習指導の経験	
第1グループ	A	男性	40代	事務職	4年	中間管理職(総務部長)	3～5年	なし	-	なし
	B	女性	40代	介護福祉士 ケアマネジャー	6年 14年	中間管理職(居宅管理者)	15年以上	あり	大学生・初任者研修	なし
	C	女性	50代	介護福祉士	18年	(提供責任者)	6～9年	あり	初任者研修	あり
	D	男性	40代	介護福祉士	18年	-	15年以上	あり		なし
	E	男性	30代	介護福祉士 ケアマネジャー 生活相談員	7年 6年 6年	中間管理職(提供責任者)	6～9年	あり	中学生・高校生・大学生	なし
第2グループ	F	男性	30代	介護福祉士 ケアマネジャー 生活相談員	7年 3年 4年	-	10～15年	あり	中学生・高校生	なし
	G	女性	50代	介護福祉士	18年	中間管理職(施設係長)	15年以上	あり	看護福祉学生	なし
	H	女性	40代	介護福祉士 ケアマネジャー 生活相談員	16年 3年	中間管理職	15年以上	あり	大学生・中学生	あり
	I	男性	40代	介護福祉士	12年	中間管理職	15年以上	あり	養成校・専門・大学	なし
	J	男性	40代	介護福祉士 生活相談員	18年	中間管理職(係長)	3～5年	あり	介護	なし

2. 実習指導者の認識と実習環境に関わる分析結果

分析の結果、181のコードが抽出され、8カテゴリ、27サブカテゴリが抽出された。8つのカテゴリは【看護学生とは距離感があり看護実習をイメージで捉える】、【介護は日常生活支援、看護は治療・療養支援をする】、【実習環境に課題がある】、【学べる環境としての実習施設】、【認知症高齢者の理解とケアの工夫・葛藤】、【高齢者施設で求められる看護師像】、【実習指導者の役割と葛藤】、【大学との連携で求めること】である。(表2)

以下、【 】はカテゴリ、<>はサブカテゴリ、「 」は語りの内容である。また、文中サブカテゴリ内の () は省略を意味する。

実習指導に対する認識の一つである【看護学生とは距離感があり実習をイメージで捉える】では<看護学生とは距離感がある><看護実習は経験がなくイメー

ジで捉える>の2つのサブカテゴリが抽出された。

福祉関係学生の実習指導は、介護が中心であったが、看護学生に対する指導はほとんど経験がなく、医療系の領域にいる看護学生の実習指導に戸惑いを感じていた。「看護っていう部分で自分たちから線を引いちゃっている部分があるのかなって。・・・ドクターの間にいるみたいな感じになっちゃうんだけど。・・・根本的に同じというのは理解しているんだけどどっか違うんだろうなって、線引きが勝手に、私たちが知らないというところをすごく大きく出ちゃっているのかなって思うので、実習の目的を読み込んで学生と共有していかないといけない、こわいな。」と看護学生への実習指導の経験のなさから不安を感じていた。また、「看護の学生さんがいたら日誌見せずにバイタル見せるよね。介護だとバイタル見せないで日誌見せているよね。その差がすごい勝手に線引きしているんだなあ

って。」と、実習のさせ方について自ら線引きしていることが語られた。実習生のイメージは、「日々勉強していて、・・・いい意味でプライドが高い。」「看護は志が皆ある。他学部より倍以上のレポートがあり勉強は大変だが、国家試験に向かって一直だと思う。」と学生に対し肯定的な印象を持ちながら、「看護師になるための通過点として実習に来ているイメージもある。」「老人施設に無理やりきているというイメージもある。」と否定的なイメージも語られた。

実習内容については、【介護は日常生活支援、看護は治療、療養支援をする】としく介護は日常生活のサポート、看護は療養のサポートをするく看護も介護も共通の理念があるくの2つのサブカテゴリーが抽出された。

「介護のイメージは、三大介護、排泄、入浴、食事が主で生活を支えるというイメージで、看護は治療的処置だったり、病状管理だったり、状態観察を主にやっているような・・・病状管理が主で、中身が違う。」と語り、看護師につく実習は医療で、介護福祉士につく実習は生活支援や癒しと捉えていた。「利用者に対して寄り添うという入口は一緒で、利用者に寄り添った上で、介護に関することは日常生活のサポートがあり、看護については病気やけがなど治療とか療養のサポートとして役割分担がなされているので、その中で実習がなされるのかなと捉えている。」という認識であった。

実習施設的环境では、【実習環境に課題がある】としく学べる環境として不十分な部分があり課題があるく実習受入れに負担感を抱く職員と期待を抱く職員がいるくの2つのサブカテゴリーが抽出された。実習環境としてはロッカーがない、忙しく教えられる環境ではない。職員にはパンフレットの写真などのイメージで入職する人もいて、言葉使いや接し方、認知症の人への対応に課題を感じていた。「教える人が毎日同じというわけではないので代わった時に言っていることが違うと困るので、・・・教えてくれる人はすごい人だけど怒っている（人がいると）雰囲気は伝わるから。入居者が怖がっていたらいい環境とは言えない。」と、介護の質の問題、学生に教える以前の問題があるとく学べる環境として不十分な部分があり課題があるくことが語られた。また、実習指導を全力で取り組むことは変わらないが、職員は入居者にも対応し切羽つまった状況でやっているなので漏れる部分もあるとの不安を語っていた。「末端の話だよ。現場として

は全然メリットがないという話なんで、恥ずかしい話だけど、それが何年後自分たちのところまで返ってくるが見えない。そこまでの余裕がないというのが現状としてあるから。」とく実習受入れに負担感を抱く職員と期待を抱く職員がいるくと実習受け入れに対し意識に差があることが語られた。

一方、【学べる環境としての実習施設】ではく学べる高齢者施設での看護く信頼関係を築きコミュニケーションをとるく地域や制度の中でのケアを知るくの3つのサブカテゴリーが抽出された。福祉施設での看護師の役割や支援内容、福祉施設での高齢者の生活と療養支援の内容、病院退院後の経過処置を学ぶことができるとしていた。「病院だと本人を中心に医療が周りを囲んでいるというイメージがある、本来の地域に戻ったりとか、生活支援という意味では本人が中心にあって、生活があってそれに寄り添う形で医療がちょっとのっているっていう考え」の医療機関と高齢者施設における支援の違いが語られ、入居者の生活を理解しそれに寄り添う支援を間近で体験できること、認知症の人には同じ職員が対応して信頼関係を築き声かけの仕方や表情の捉え方を学べる環境であることが語られた。実習施設で、学んでほしいことは、関係性の中でのコミュニケーションの取り方、利用者との対応、挨拶、社会人としてのマナー、接遇など、施設が高齢者と接するときには大事にし、看護においても関係性を築くうえで重要な点が上がっていた。また、福祉ならではの地域包括ケアシステムや、国の施策の概念的な面、介護保険の中での支援内容、福祉の良さなどがあがり、ノーマライゼーションを実際に感じてもらえる機会でもあると捉えていた。

【認知症高齢者の理解とケアの工夫・葛藤】では、く認知症ではなくその人個人を見るく認知症高齢者の理解に添った対応く拒否したときはその場に合った対応をするく認知症ケアにおける葛藤くの4つのサブカテゴリーが抽出された。その中で、認知症を理解すること、認知症の日常生活での行動や症状、一人ひとり違う個別ケア、認知症ケアでの多角的な考え方、行動・心理症状 (behavioral and psychological symptoms of dementia、以下 BPSD と略す) に対する忍耐力、パーソン・センタード・ケアを学んでほしいとしていた。「認知症になったら5分前のことを忘れてしまう、我慢ができなくなる、それが日常生活でどういう行動と症状で表れるか、繋がっていないから実際の場で繋がるよう実生活ではどうなるのを学んで

ほしい。」「認知症という病気がさまざまな行動を起こしているのであって高齢利用者が悪いわけじゃない、認知症があったとしてもここが残っているの、される側の気持ちも理解して、笑顔と癒しが与えられるようなケアが大切だという事を学んでほしい。」と語られた。また、拒否には理由があり、回路が混じって昔のことが多く出てしまうということを実際に感じてもらう。認知症の人も長年人付き合いをされてきた人であり、気持ちが入っていないと敏感に感じ取ること、乱暴な人もずっと笑顔で職員が接すると変わることを実習で感じてほしいと「認知症ではなくその人個人を見る」<認知症高齢者の理解に添った対応>を語っていた。さらに、認知症の人とのコミュニケーションは難しく、やり取りの間に不穏になること、たとえば、「デイ（サービス）ですよって来てくださいってやり取りをしている間に本人が不穏になっていく。そしたらデイ（サービス）にも行けない状態になっていく。でもそれを言わないで自然にやったら喜んで行く。」また、「うちなんかトイレに行ってくださいからね。びしょびしょになって、トイレに行きませんから。トイレ行きましようって言ったらすごい悲鳴あげて嫌がったりするので、そうすると本人が不利益じゃないですか。・・・そこはちょっとすみませんが用事あるので来て下さいと言わないと来てくれない人もいますので、本人の不利益、まわりからの白い眼を避けるためにも、そこはうまく伝えないとね。」と語り、本人の不利益にならないようなコミュニケーションを工夫していることが語られた。現場ではその人に合ったケアや、その人の考えを理解したうえで声掛けする、問題行動として捉えるのではなくなぜそのようになったかの視点をもってかかわるなど、<拒否したときはその場に合った対応をする>ことが語られた。一方、人格が壊れたようにみえるので、パーソン・センタード・ケアから外れやすいことや、認知症の人はわからないことでつい叱られる人もいたり、嘘をついてデイ（サービス）に誘っていることを迷っていること、嘘であっても楽しく参加していればよいと正当化していることに心を痛めていることなどの<認知症ケアにおける葛藤>が語られた。

【高齢者施設で求められる看護師像】では<病院での看護を経験している><日常の医療的なアセスメントができる><施設を理解している>の3つのサブカテゴリーが抽出された。高齢者は非定型性の症状が多く、訴えも少ないため観察力、判断力を必要とし病院

で経験を積んだ人、医療方針は看護師が決めるためその役割は大きいこと、医師への病状説明ができる看護師などが求められた。また、常に医師がいる病院での役割との違いもあることから施設に順応する看護師、多角的にとらえられる看護師像が語られた。

【実習指導者の役割と葛藤】では、実習指導者の役割として<倫理観や道徳観を教える><目標を達成するよう導く><学生が自分で考えられる力がつくよう指導する><認知症高齢者ケアの実際を伝える><社会人としての基本を学んでもらう><連携としての指導者の役割><職員のスキルアップになる>の7つのサブカテゴリーと、<十分な実習指導への葛藤>の1つのサブカテゴリーが抽出された。職業倫理に関わる倫理観・道徳観や、向いていない人には違う道の選択肢を与える、続けられるモチベーションを伝える、失敗して嫌われてもその人に好きになってもらうための心理的支援と、認知症の人の正しい理解とアプローチの仕方の実際的指導などが語られた。目標をはっきり持ち看護職の視点で目標を達成するよう導く、実習の振り返りやオリエンテーションなどを行う、行われているケアや看護師の施設での役割も考えられるよう指導するとしていた。また、実習指導者は学生について学校や施設の中での橋渡しの役割もあるとし、挨拶や遅刻の指導、社会性や仕事の厳しさを教えることも役割としていた。また、理論立てて説明するための裏付けが必要になるため<職員のスキルアップになる>と語っていた。一方、実習指導の葛藤では、自分の知識で教えられるか、実習生に言い過ぎないかとの個別的な不安が語られた。また、専門の実習担当としての職員配置は難しいことから、現場の仕事と実習指導の両立への葛藤、実習指導者が代わることで指導内容が変わることへの<十分な実習指導への葛藤>が語られた。

【大学との連携で求めること】では、<実習目標を明確にする><施設が大学に情報提供として求めること><実習受け入れへの要望>の3つのサブカテゴリーが抽出された。目的・目標達成できるように指導者との指導内容の調整、カリキュラムの進行や学生について大学と連携をとることが求められた。学生は何を目標とし何を得たいのか、学生の情報、特にコミュニケーション能力などの情報を共有し、実習指導に当たりたいと語られた。また、実習が適正に進んでいるか大学と連携を図り、施設の中での学生の学びを共有したいと語られた。さらに、分野が違うため専門用語について職員にわかるように工夫することが求められ

た。実習の受け入れについては、〈実習受け入れへの要望〉が抽出され、「直接大学がくることによってダイレクトに話ができていい連携ができるのはメリットというのは当然なんですけど、ダイレクトに来ると言う方が少なくとも負担があったりとか、どうしたらいいんだろうと不安がある。」と話し、「大学も同じようにシステムが構築されているとよりいいのかなと。・・・社会福祉協議会が中心になって、先ほどのような平均化という意味では、密という意味では確かに離れてしまっているところはあると思うけど、負担が少な

かったり、・・・、独自性にはちょっと欠けるけれども、より多くの送り込みができるというところはすごく大きい。」と、負担感の少ないシステム化について語られた。また、実習を受け入れる事は有意義なこととし、受け入れには前向きな姿勢を示した。しかし、「これから福祉医療をしょって立つ人材を育てる大学と大切な人材を預かる受け入れ先双方のどちらかが無理して取り組むのではなくて、少なくとも金銭的な心配がないような形でやればいいのかと思う。」と実習受け入れによる経済的負担感が語られた。

表2 フォーカスグループインタビューの分析結果

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
看護学生とは距離感があり看護実習をイメージで捉える	看護学生とは距離感がある (8)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師になるための通過点くらいで実習に来ているというイメージが多少ある。 ・老人施設に無理やりいかないというイメージ ・看護学生は医療が入っているので、勉強する内容が違う。 ・看護学生は国家試験に向けて志が明確と思う。 ・国家試験があり他の学部比べて大変と聞いている。 ・老健施設での看護師は若い方はほとんどいない状況だったので、看護学生とは距離感として遠い。
	看護実習は経験がなくイメージで捉える (11)	<ul style="list-style-type: none"> ・ドクターの間にいる感じ、知らないから勝手に線引きしている。 ・勝手に線引きをして看護の学生には日誌を見せずにバイタルを見せるが、介護の学生にはバイタルを見せないで日誌を見せる。 ・看護実習の概念として学ぶべきところが両方なのか、看護職員の視点での実習なのか捉え方がわからない。 ・医務室の看護師について血圧を測定、薬塗るという実習イメージ ・看護実習は医療、介護は生活援助を行う。 ・看護学生の実習を受け入れたことがない。 ・介護実習は日々のケアを教えればいいが看護はそれに+αの指導力が必要
介護は日常生活支援、看護は治療・療養支援をする	介護は日常生活のサポート、看護は療養のサポートをする (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・介護のイメージは、三大介護、排泄、入浴、食事が主で生活を支える、看護は治療的処置、病状管理、状態観察などが主 ・利用者に寄り添った上で、介護は日常生活のサポート、看護は病気やけがなど治療とか療養のサポートとして役割分担がなされている。 ・看護師につく実習は医療的、介護士につく実習は生活や癒し ・病院でも看護師は医療的処置で排泄や食事は助手と医療と介護に分かれている。
	看護も介護も共通の理念がある (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・理念、目的は介護と看護は同じだが中身が違う。 ・介護実習は掃除はつきもの、清潔の保持は大事で看護も環境整備は多分大事と思う。
環境に課題がある	学べる環境として不十分な部分があり課題がある (13)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもになってしまう〇〇病の人とよんだのを先輩職員が、〇〇さんという人でしょう (と注意した)。偏った見方をしている。 ・介護の質の問題もある。自分がいるときは利用者に敬語で話しているがいないときには舌打ちしたりと聞くと学生に教える以前の問題になる。 ・実習環境としてはロッカーがない。忙しい、バタバタ動いているとなるとちゃんと教えられる環境ではない。 ・パンフレットの写真や、車いすを押していると言うイメージを持つ方が多い。 ・職員も切羽つまった状況でやっているの、入居者に対応したうえで適切な確実な指導まで求められると現場の職員は厳しいものがある。 ・全力で取り組むことは変わらないが通常の業務のプラスαでやっているの、どうしても漏れてしまう部分がある。 ・教える人が毎日同じというわけではないので同じ志を持って誇りを持った人たちが指導するが、一緒に働いている人たちがしかめっ面をして介護や看護するのを見ると、雰囲気は伝わる。入居者が怖がっていたらいい環境

		<p>看護するのをみると、雰囲気が伝わる。入居者が怖がっていたらいい環境とは言えない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの勉強にもなると思う職員が少なく、現場職員の指導も大きい課題 ・専門の実習担当としての職員配置は現状として難しい。
実習受入れに負担感を抱く職員と期待を抱く職員がいる(6)		<ul style="list-style-type: none"> ・現場としては全然メリットがない。何年後自分たちのところに帰ってくるのか余裕がないので見えない。 ・実習の主な担当者はフォーカスグループインタビューを受けている者、アンケートを受けた職員が主軸になるが、そこまで認識できている者はまだ半分くらいだと思う。 ・上の考えと下の考えのずれが出るんじゃないかという不安がある。こんなバタバタしているときに何で受け入れるのというのが第一声。今後を担う子たちを育てる意識でやってくださいというけど、現場はそんな気持ち全くない。 ・将来のために受け入れなきゃいけないと思っているが受け入れる介護職の人たちは負担にしかかかっていない。私たちのクラスはいいきっかけだと思っている。
学べる環境としての実習施設	学べる高齢者施設での看護(7)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域に戻った時生活支援では本人が中心にいて生活がありそれによりそう形で医療があるという考え方 ・実習生には福祉の良さを持ち帰ってもらいたい。 ・生活の場である老人福祉施設とそこでの看護医療の役割を示す。 ・老人ホームでは治療ではなく経過処置を見せる。 ・福祉施設の看護師と病院での看護師の業務を学べる環境
	信頼関係を築きコミュニケーションをとる(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・入居者の生活を理解しそれに寄り添う支援を行う。 ・認知症高齢者に対して信頼関係の面から同じ職員が対応できるような体制でやっている。 ・訪問介護の実習でコミュニケーションの取り方や、利用者との対応、挨拶を学ぶ。 ・現場の職員は接遇という事で利用者は人生の大先輩だから基本的には敬語をつかい、敬う。 ・どのようなケア、見守りをしていくのかを深く考える。
	地域や制度の中でのケアを知る(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域包括ケアシステムや、国の施策の概念的な面も覚えるとよい。 ・マライゼーションとかを実際に感じてもらえる初めての機会として提供できる。 ・実際の現場で利用者、職員と接することだけではなく介護保険の中でやっている事業、見るもの触るもの空気を感じ取るというと思う。 ・高齢者施設や在宅訪問をとおして地域人としての役割や家庭人としての役割があることに気づく。 ・地域と密着している部分をわかりやすく伝える。
認知症高齢者の理解とケアの工夫・葛藤	認知症ではなくその人個人を見る(14)	<ul style="list-style-type: none"> ・現場ではその人を見てその人に合ったケアや、その人の考えを理解したうえで声掛けする。 ・すごい病気という感覚でとらえる方が多くて世間的に認知症に対する理解がまずいので、学生に認知症を理解してもらいたい。 ・認知症だからでなく人を見てほしい。 ・認知症がある〇〇さんでなくて、〇〇さん個人に対するケアというのを考える。 ・パーソン・センタード・ケア、病気じゃなくてその人だけを考えることを学ぶ。 ・認知症の人はもの忘れをする人、言ってもわからない人が認知症というイメージだが、わかっている方も中にはいるので実習で感じてもらいたい。 ・認知症の方は感情がそのままストレートになってこだわりの中で生きている一人の人間としてかかわってほしい。
	認知症高齢者の理解に沿った対応(11)	<ul style="list-style-type: none"> ・認知症の高齢者ケアというより個別ケアを学んでもらいたい。 ・認知症があってもこころが残っているので、される側の気持ちも理解して、笑顔と癒しが与えられるようなケアが大切 ・デイですよって来てくださってやり取りをしている間に本人が不穏になっていく。自然にやったら喜んで行く。 ・認知症になったら5分前のことを忘れてしまう、我慢ができなくなる、それが日常生活で、どういう行動や症状で表れるかが繋がっていないから実際の場で繋がるよう実生活ではどうなるのを学んでほしい。

		<ul style="list-style-type: none"> ・いい対応なのによく聞いたら嫁に似たとか嫌なことをされたとか、回路が混じっただけ、昔のことが多く出てしまうというものを実際感じてもらう。 ・認知症の方も人付き合いを長年されてきた人であり、気持ちが入っていないと敏感に感じ取る。 ・乱暴な人でもずっと笑顔で接すると効果が現れる。 ・認知症があっても相手に言葉が通じない、わかっていないという事ではないので声をかけて真摯に表情を（みて）、そういうことをしている。
	拒否したときはその場に合った対応をする (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレに誘うと悲鳴あげて嫌がったりするが、汚れたままで動いていると本人の不利益になる。用事あるので来て下さいと言わないと来てくれない人もいますので、そこはうまく伝えたい。 ・拒否するには理由がある。 ・問題行動として捉えるのではなく、なぜそのようになったかの視点をもつ。 ・いやいやデイサービスに行っているんだったらうそをついて、だましてつれてきたになるが本人が楽しんでいるならコミュニケーションの方法になる。
	認知症ケアにおける葛藤 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・人格が壊れたようにみえるので、パーソン・センタード・ケアから外れやすい。 ・認知症の人はわからないことでつい叱られる人もいると言うことを事前に情報提供する。 ・嘘をついてデイに誘うがほんとのことを言って説得するのは難しく指導者としては迷う。 ・身に覚えがあるからそこは正当化している。心が痛いところもある。
高齢者施設で求められる看護師像	病院での看護を経験している (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者は非定型性の症状が多いので、病院で経験を積んだ人 ・医師への病状説明は病院で長年働いた方がスムーズ
	日常の医療的なアセスメントができる (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・週に1、2時間だけドクターがくる状況で、それ以外の健康管理とか医療的処置はすべて看護師が行う。 ・医療の方針は看護師が決めその役割は大きい。 ・在宅では高齢者は肺炎も気づきづらい、脱水症状もみぬけにくくどの時点で受診させるか、一人ですべてのことをやるので、病気の知識を持っていないといけない。 ・利用者も自分から具合が悪いとあまりいわないので、普段の様子から判断しなくてはいけないので訪問看護は難しい。 ・老人高齢者施設は看護師が医師の代わりの立場にたつので、経験が少ない新卒には知識量や経験で培う部分の荷が重い。
	施設を理解している (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・施設に順応する看護師 ・多角的にとらえられる看護師 ・学生の時に福祉施設での経験があれば施設の見方も違ってくるので大事な実習
実習指導者の役割と葛藤	倫理観や道徳観を教える (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・向いていない人には違う道の選択肢を与えてあげるのは指導者としては必要で倫理観や道徳観を教えないといけない。 ・大変な部分を打ち出すとその人の倫理観を崩してしまう形になるので実際例として提示しなければいけない。
	目標を達成するよう導く (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・続けられる大きなモチベーションを伝えたい。 ・目標をはっきり持ち看護職の視点で見ると。 ・指導者の役割は実習の振り返りやオリエンテーションなどを行う。 ・目標を達成するよう導く。 ・はじめて行く施設がその人にとって判断のすべてになる。だから老年看護で職員がつかうさうだというイメージを与えると第一印象で決まるところが多いと思う。
	学生が自分で考えられる力がつくよう指導する (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護大学生だと施設で看護師はどうかかわれるかを考えられるよう役割ができればよい。 ・学生にびしょびしょなっていたらどう思うか感じてやってほしい。そういうかわりの中で高齢者に関わっていきなさいいけないという。 ・行動的な部分を起こしたとしたら それに対してなんでしたんだろうと考えなさいいけないのが認知症のケア。なんでだろうって思うことを教えてあげると、認知症の周辺症状とかに会った時でも考えられる力をもてると思う。要は認知症に対する考え方を教える。
	認知症高齢者ケアの実際を伝える (9)	<ul style="list-style-type: none"> ・失敗して嫌われてもその人に好きになってもらうために頑張ろうということを伝える。 ・認知症を患っている人のアプローチの仕方を先入観、間違いないように正

		<ul style="list-style-type: none"> ・ しく伝えることが大事 ・ 正しい認知症の理解とアプローチと支援を伝えていくのが大事 ・ 基本のテクニックを丁寧に話し、テクニックでも表面的になると見すかされてしまうことを教える。 ・ 個別ケアは何を望んでいるのか個々を見ることを伝えたい。
社会人としての基本を学んでもらう (4)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会人としてのマナー、接遇 ・ 学生には挨拶や遅刻の指導を行う。 ・ 挨拶を徹底する環境を作り学生に学んでもらう。 ・ 社会性や仕事の厳しさを教えるのも役割
連携としての指導者の役割 (3)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校での生徒の様子、特徴を、逆に施設の中での学生の様子を先生に伝えて橋渡しの役割が指導者に求められる。 ・ こちらは実質の状況として大学と連絡を取り合いながら教える。 ・ 学校ではこうだけど施設の中ではこうということがあるので、学生と一緒に見て連携する。
職員のスキルアップになる (5)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分がやっていることを理論立てて説明するための裏付けが必要だったりすることがあるので職員も勉強になる。 ・ 指導することは自分が何をもってその入居者に対して接しているかということも伝えなければいけないので自分も勉強になる。 ・ 学生も育てなければいけないけど 私ら職員のスキルを育てるといふ部分はすごいきっかけになる。
十分な実習指導への葛藤 (6)		<ul style="list-style-type: none"> ・ 勤務が不規則で指導者がかわるのが課題 ・ 現場の仕事もしながらなので実習生の指導は難しくきちんと指導できない。 ・ 自分たちの知識で教えられるのかっていう怖さ ・ 実習生に言い過ぎないか不安 ・ 学生の芽はつぶしたくないので、どうやればよいか難しい。 ・ 看護学生が実習に来てよかったといってもらえるか我々もみえない。
大学との連携で求めること	実習目標を明確にする (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的・目標達成できるように指導者、指導内容などの調整をする。 ・ 学生は何を目標とし、何を得たいのかわかると教えやすい。
	施設が大学に情報提供として求めること (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実習のカリキュラムを踏まえて学生の性格、特徴 長所を実習に取り入れられるように、大学での学習につなげられるように連携を図っていく。 ・ いろんな学生がいると思うので気を付けてという学生の情報、コミュニケーション能力が苦手な学生がいたら知らせてもらおうと接しやすい。 ・ 分野が違うので専門用語が多いと現場の職員まで染み渡らないかと懸念がある。教員で工夫してほしい。
	実習受け入れへの要望 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実習や体験学習は受け入れがシステム化されているが、看護実習は大学からダイレクトにきて連携ができるのはメリットだが、負担があったり不安がある。 ・ 大学もシステムが構築されると独自性には欠けるが、施設の負担が少なかったり、より多くの送り込みができるというメリットは大きい。 ・ 自治体や国が実習を依頼する側と実習を受ける側と補助があるといいと思う。福祉医療の人材を育てる大学と受け入れ先の双方が無理して取り組むのではなくて金銭的な心配がないようにやればよい。

VI. 考察

1. 看護実習に対する受け入れ体制

施設における実習指導予定者は、2人を除いて看護実習を受け入れたことがなく、学生に対する認識は【看護学生とは距離感があり看護実習をイメージで捉える】であった。福祉関係の実習では生活支援を中心に実習指導を行ったが、看護学生に対してはどのような立ち位置で関わればよいのか不安、すなわち、【介護は日常生活支援、看護は治療、療養支援である】との捉えから、看護師と介護福祉士の役割分担の中で実習指導が行われるのか、または、医療面まで指導が求め

られるのか、その場合は対応が困難という不安を抱いていた。学生に対しては看護職になる意識が高くまじめに取り組むという肯定的な捉え方の反面、医療機関とは異なる福祉施設への実習は義務で来るのではないかという否定的なイメージも持っていた。看護学生の実習指導への経験のなさからくる看護学生と介護学生の実習指導の線引きは、実習内容や指導に影響を与えることが考えられ、実習内容を明確にするような対応が求められた。実習受け入れの対象となる看護学生についての知識が不十分な場合は、実習指導体制を整える上で影響が予測され、学生理解への調整が必要であ

ることが示唆された。

また、実習の受け入れ方については、＜実習受け入れへの要望＞があがったが、これは、専門学校や他の教育機関からの場合、実習要請や実習指導は一元化、マニュアル化されていることによる負担の少なさや、より多くの学生の受け入れによる収入面からの利点があることが推察された。これまで実習指導は施設に一任されているところからくる負担感であることが考えられたため、実習指導には指導教員が引率し、協働で実習指導に当たることや、実習謝金についても伝えることで、負担感は軽減されるのではないかと考える。

2. 認知症ケアにおける指導環境と指導体制

実習施設の環境としては、【実習環境に課題がある】、【学べる環境としての実習施設】が抽出された。学生は実習中関わる介護職員について実習指導者であるなしに関わらず実習上のサポートを求めたり¹⁰⁾、実習指導者や職員の認知症高齢者への対応から学んでおり¹¹⁾、実習環境としての職員の認知症高齢者への対応は、意図的であれ無意図的であれ、学生への学びに影響を与える要因と考えられる。職員の中には言葉使いや接し方、認知症の人への対応などに課題があると認識しており、受け入れに対しても多くの職員は否定的であるとの認識が示された。そのような環境で実習を行うことになるが、実習指導予定者は病院とは違う福祉施設での看護師の役割や支援内容、福祉施設での高齢者の生活と療養支援の内容、病院退院後の経過処置を学ぶことができると捉えていた。学生は病院実習で、疾病からの回復過程を学び、退院支援を含めた学修を行っているが、その後の高齢者の生活は想像で補っている。高齢者の普段の生活はいかようで、生活を支えるとはどういうことなのか、加えて、認知症高齢者との関わりや生活を支えるとはどのようなことなのかを学ぶことは高齢者施設に特化した学修内容である。その点から考えると、高齢者施設実習は高齢者看護を学ぶ上で重要な位置を占める。

実習指導者が学生に実習で学んでほしいことは、認知症を理解すること、認知症の日常生活での行動や症状、一人ひとり違う個別ケア、多角的な考え方、忍耐力、パーソン・センタード・ケアであった。松田ら¹²⁾は、学生の老年看護学実習において認知症高齢者の理解のプロセスを、実感を伴って理解したことを報告している。施設実習では、異常行動とともれる行動にも本人には意味があること、認知症を理解することによって

それが日常生活でどういう行動と症状で表れるのかを関連付けて理解できるようになることを実体験で学ぶことができる。人間関係を築くときの基盤である偽らず誠意をもって笑顔で接することは、パーソン・センタード・ケアの一人の人間として尊重するにつながる¹³⁾ことを、認知症高齢者の変化を体験することによって学ぶことができる。確かに、認知症高齢者とのコミュニケーションは難しく、老年看護学実習で課題とし、学生が葛藤しながらも学んだ事例は数多く報告されている¹²⁾。現場の職員は＜認知症ではなくその人個人を見（る）＞て、高齢者の尊厳を失わないような配慮とともに誠実なかかわり方をする＜認知症高齢者の理解に添った対応＞＜拒否したときはその場に合った対応をする＞を行っていた。デイサービスへの誘い方やトイレ誘導にも本人を必要としていることを伝えると応じる行動がとられていた。人間には、自立心があり、自分で決め自分で行いたいという欲求があり、自己決定はストレングスモデルの枠組においても中心的価値としている¹⁴⁾。また、人は役立ちたいという欲求があり、これらは特に高齢者にとっても自尊心につながる重要な要素である。認知症高齢者の対応でその欲求を意識し満たすような働きかけをすることは、認知症高齢者自身が自分の意思で声掛けに応じることにつながるのではないかと考える。「デイ（サービス）ですよ、来てください。」では応じず、さらに誘うと不穏になっていくプロセスは、本人の意思の尊重がないまま、誘うことの結果だと推察される。認知症高齢者は記憶障害があり物事の理解は困難な場合が多い。用事があるやお願いがあるなどのようにあなたを必要としていると話すことで応じるのではないかと考える。それは、その場を繕うコミュニケーションのテクニックではなく、心からの誠実さがなければならない。そうすることであなたとかがわりたい、結び付きたいという認知症の心理的ニーズ¹⁵⁾に叶うものであると考える。『あなたのために』という考えは本人が欲しないなら押し付けになり、服従となって興奮状態のようなBPSDにつながる¹⁶⁾。あなたが参加してくれると嬉しいという気持ちを持ち働きかけを行うのである。パーソン・センタード・ケアはいかなる場合も嘘・偽りがあってはならない¹³⁾としている。その根源的な理由は人間の尊厳に基づいた信頼関係である。それを基盤とする介護者の経験知による＜認知症高齢者の理解に添った対応＞がなされた場面を学生が体験すると、認知症高齢者理解が深まり、実際的な対応の仕方を学修

することができる。そのような、認知症高齢者とのかわり方のロールモデルを実習で示すよう依頼することは実習効果を高めることにつながると考える。しかし、人格が壊れたように見える認知症高齢者の言動はパーソン・センタード・ケアを心がけていてもつい外れやすいことや、嘘をついているという思いによる認知症ケアにおける葛藤は認知症ケアの課題である。その問題に対処するための事例検討などを、例えば大学と共同で進めていくことなどを提案することも方策の一つと考える。

学生に学んでほしいことの中に、病院とは違う【高齢者施設で求められる看護師像】が基盤にあることが推察された。それは、高齢者の特徴の熟知からくる看護師としてのスキルと、医療チームとの連携とは異なる福祉職や他の多職種協働の中での看護師の役割である。それは、丸山らの施設の看護職の役割¹⁷⁾や石垣らの施設における老年看護¹⁸⁾の報告にあるとおり、多角的な考え方でできる柔軟な看護師像が根底にあることが考えられ、実習における施設での学びは専門的な知識に加え、医療現場にとどまらず、どの職場・環境にも適応する学生の柔軟な発想を育むことにもつながると考える。

また、実習指導予定者から、実習指導者の役割として、認知症の人の正しい理解とアプローチの仕方の実践的な技術指導と、目標達成のための支援のほか、倫理観・道徳観、向かない人への違う道の選択肢の提供、モチベーションの維持など、専門職に携わる人の職業観や意欲の心理的支援についても語られた。これらは高橋¹⁹⁾の実習指導者の役割とも類似し、実習指導予定者には実習指導者の一定の資質は備わっているといえよう。臨地実習では看護実践能力を培う場であることから、そのような実習環境と実習指導体制の中で、高齢者施設の特徴をふまえて、看護の視点で知識・技術・態度を総合的に学修できることは、人間力を高める意味でも重要である。ただ、実習施設は学生の特性とミスマッチの場合の指導が与える学生への影響や、指導上求められる知識量への不安を抱えており、大学との指導体制の連携が求められた。さらに、施設内での指導体制の不十分さからくる不安などが語られたことから、相互補完的な協力を行う⁷⁾大学と施設の連携の在り方が求められた。また、学生指導を体験した後は漠然とした心象から明確に捉えることにより不安感が低減するという報告²⁰⁾もあり、常に実習指導者との情報交換とフィードバックは有用と考える。【大学

との指導連携で求めること】として、目的・目標達成できるように指導者との指導内容の調整、カリキュラムの進行や学生に関する情報を共有し実習指導に当たりたいと語られたことから、密な大学と施設との連携を基盤に、特にコミュニケーション能力に関する情報連携は、実習の学習効果を高めるためにも重要と考える。

Ⅶ. 結論

高齢者施設の実習指導予定者を対象に老年看護学実習に対する認識と実習環境についてフォーカスグループインタビューを行い、分析した結果、【看護学生とは距離感があり看護実習をイメージで捉える】、【介護は日常生活支援、看護は治療・療養支援をする】、【実習環境に課題がある】、【学べる環境としての実習施設】、【認知症高齢者の理解とケアの工夫・葛藤】、【実習指導者の役割と葛藤】、【高齢者施設で求められる看護師像】、【大学との連携で求めること】の8カテゴリーと27サブカテゴリーが抽出された。看護学実習の経験がないことから【看護学生とは距離感があり看護実習をイメージで捉える(る)】ており、看護学生への知識不足や実習受け入れへの負担感は、実習指導体制を整える上で影響が予測され、実習指導者との連携や大学と施設との連携を密にすることが求められた。

また、実習施設的环境としては【実習環境に課題がある】と認識していたが、施設実習ならではの学びがあることが表出された。特に認知症高齢者の理解と適切な対応として「認知症ではなくその人個人を見る」<認知症高齢者の理解に添った対応><拒否したときはその場に合った対応をする>の実践的学びと「認知症ケアにおける葛藤」のように現場のもつ課題も学修できる環境であることが明らかになった。また、常に医師がいる病院での役割と違う【高齢者施設で求められる看護師像】や【実習指導者の役割と葛藤】として「倫理観や道徳観を教える」<目標を達成するよう導く><学生が自分で考えられる力がつくよう指導する><認知症高齢者ケアの実際を伝える><社会人としての基本を学んでもらう><連携としての指導者の役割><職員のスキルアップになる>の7つの実習指導者の役割が明らかになり、実習指導者の教育的視点は知識面だけでなく礼節や尊厳など対人関係の基盤についても意識が高く、看護職に必要とされる能力を協働で指導できる環境があることが示唆された。【大学との指導連携で求めること】から、密な大学と施設との

連携を基盤に、特にコミュニケーション能力に関する情報連携は、実習の学習効果を高めるためにも重要と考える。

引用文献

- 1) 総務省統計局 (2020.9.20.): 統計からみた我が国の高齢者 <<https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/topics126.pdf>> .
- 2) 二宮利治, 清原裕, 小原知之, 他: 日本における認知症の高齢者人口の将来推計に関する研究, 厚生労働科学研究費補助金 行政政策研究分野 厚生労働科学特別研究.
- 3) 石川りみ子, 石津仁奈子, 江口恭子: 高齢者施設における老年看護学実習としての実習環境の現状, 秀明大学看護学部紀要, 1 (1), 55-64, 2019.
- 4) 松井宏樹: 看護学生が認知症高齢者に抱く困難に関する文献検討, 人間看護学研究, 18, 41-48, 2020.
- 5) 高野 真由美, 松本 佳子: 認知症高齢者との関わり時に看護学生が抱く気持ちへ関連する要因, 川崎市立看護短期大学紀要, 25 (1), 47-54, 2020.
- 6) 白砂恭子: 老年看護学実習における認知症高齢者に対する学生の学び, 日本認知症ケア学会誌, 17 (2), 464-471, 2018.
- 7) 望月紀子, 白水真理子, 宮芝智子: 看護学実習において看護教員が主導して行っている実習指導者との協働, 神奈川県立保健福祉大学, 17(1), 27-37, 2020.
- 8) 栗谷亜紀, 灘波浩子, 岡本恵里: 看護学実習における看護師としての指導行動に対する自己評価および実習受け入れに対する捉え方, 三重県立看護大学紀要, 19, 31-41, 2015.
- 9) デジタル大辞泉, 小学館
- 10) 治田祐子, 米田恭子, 内田有香, 他: 臨地実習における看護師の役割とその実態, 第43回日本看護学会論文集 看護教育, 43, 118-121, 2013
- 11) 中澤明美, 山下菜穂子, 山田ノリ子: 高齢者施設実習において、看護学生が捉えた認知症高齢者との関わり場面から得た学び, 了徳寺大学研究紀要, 12, 117-126, 2018.
- 12) 松田千登勢, 長畑多代: 老年看護学実習における学生の痴呆性高齢者の理解プロセス, 大阪府立看護大学紀要, 10 (1), 43-50, 2004.
- 13) 水野裕: 実践パーソン・センタード・ケア 認知症をもつ人たちの支援のために, 株式会社ワールドプランニング, 82 - 85, 107 - 109, 2008.
- 14) 小松光代, 黒木保博, 岡山寧子: 介護老人福祉施設における痴呆性高齢者ケア技術の明確化－介護スタッフの日常生活援助場面への参加観察による質的分析－, 日本痴呆ケア学会誌, 2 (1), 56-67, 2003.
- 15) 鈴木みずえ: パーソン・センタード・ケアの理論と実践 パーソン・センタード・ケアの理念と認知症ケアマッピング (DCM), 日本早期認知症学会誌, 7 (1), 2014.
- 16) 伊東美緒, 宮本真巳, 高橋龍太郎: 不同意メッセージへの気づき: 介護職員とのかかわりの中で出現する認知症の行動・心理症状の回避に向けたケア, 老年看護学, 15 (1), 5-12, 2011.
- 17) 丸山泰子, 榎直美, 横尾美智代: 介護老人保健施設の看護職の役割・認識とやりがい感との関連, 日本看護研究学会雑誌, 38(5), 23-32, 2015.
- 18) 石垣範子, 深江久代: 臨地実習指導者の語りを通じた老年看護についての一考察, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 29, 57-68, 2015.
- 19) 高橋久美: 教育－臨床の連携 実習受け入れ体制, 看護, 63(4), 86-91, 2011.
- 20) 神成真, 北田隆義, 木村永一: 看護学生の臨地実習受け入れ初年度の病棟看護師に対する意識調査, 第38回日本精神科看護学術集会, 56(1), 378-379, 2013.